陳舜臣さんを語る会通信

NO.85　Sep.　2022

発行　兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34
橘雄三方「陳舜臣さんを語る会」
Tel.078-911-1671
編集　「陳舜臣さんを語る会通信」編集委員
発行日　2022年9月29日
http://www.eonet.ne.jp/~yuzo/

50年前の9月29日「日中共同声明」調印　神戸新聞に陳舜臣氏談話

日本と中国は9月29日、国交正常化50年の節目を迎えました。ここに、50年前、1972年9月29日付神戸新聞夕刊に掲載された陳舜臣氏の談話を取り上げます。　（編集委員　橘雄三）

1972年9月29日
神戸新聞夕刊1面 →

神戸新聞（夕刊）　昭和47年（1972年）9月29日

日中国交を樹立

歴史的共同声明に調印

共同声明を交換、固い握手をかわす田中（左）、周両首相

半世紀の空白に終止符

戦争終結を確認

平和条約・大使交換急ぐ

対日賠償は放棄

中国国民への損害反省

日本国政府と中華人民共和国政府の共同声明（全文）

台湾と事実上断交

外相が見解表明　日台条約は失効

日中共同声明の骨子

対日報復に触れず

蒋国府首相、議会で演説

首相一行上海へ

北京空港で盛大な歓送式

同紙15面 陳舜臣氏談話
↓

「歴史的な意味での"日中関係"は、きょうから始まるのですよ」と、はればれとした口調で語る陳舜臣さん

長く暗い夜は明けた

はればれ陳舜臣さん

私も友好のかけ橋に

中国に"水に流す"はないが

文具の富士商会

すし常

「日中共同声明の骨子」を抜粋、活字起こしいたしました。

一、不正常な状態の終了
二、中国は唯一の合法政府
三、中国は台湾が中国の不可分の一部であることを表明、日本はこれを理解、尊重
四、大使館の設置、大使の交換で合意
五、戦時賠償の放棄
六、平和五原則を確認
七、覇権を求めない
八、平和友好条約の締結
九、貿易、海運条約の締結

陳舜臣さんの談話（1頁掲載）を活字に起こしました　傍線は編集委員の加筆

長く暗い夜は明けた

「長くて暗い夜がやっと明けたという感じだ。本当の意味での日中国交はきょうから始まるんですよ。私も来月初めには、生まれて初めて帰国することになりましたが、新しい中国をこの目でしっかりと見てきたい」ー。歴史的な日中共同声明が発表された二十九日、神戸に生まれ育った中国人作家・陳舜臣さん(四八)ははれればれとした口調で語った。

「日本人と中国人は姿、かたちはもちろんのこと、どちらも米を主食にする稲作民族。しかも、使っている漢字は同じ、世界中でこれほど似かよった民族はいないでしょうねえ。それだけに日本人の側に、中国のことなら何もかもわかっているという錯覚があったのではないでしょうか」

ところが、実際にはわかっていないことの方が多かったのだと、陳さんは、これまでの日中関係の〝原点〟を批判する。しかも、日本人の中国に対する誤解は、維新前、長州藩士の高杉晋作らが太平天国の乱で混乱しきった上海を訪れ、「理念の中国と現実の中国とのあまりの違いにびっくりした」ときに始まり、それ以来百年以上も続いてきたーというのが作家の目からの指摘。

国民性一つをとっても、日本人はせっかちで、物事を一気呵成にやってしまうのに対して、中国人はじっくりとチャンスを待って進めていく性格。その典型的な現われが、日中会談に至るまでの周首相と田中首相の準備の違いだという。

「中国ブームが起こると、政治家をはじめ財界人も、文化人もわれ先に中国へ笑顔を向ける。まさに日本的ですねえ。最近、盛んに論議されるようになった中国への〝贖罪論〟にしても、一時的なムードに思えて仕方がない。国交が正常化すれば、これまでのことはすべて〝水に流せた〟という気持ちになっているのではありませんかー」

中国には「水に流す」という感覚はない、俗にいえば、もっとひつこいわけ。戦争中のできごとについても、いまも太い記憶のパイプが続いている。この両方の〝差〟を十分に理解しておかないと、戦争終結という言葉の意味を取り違えるーというのだ。

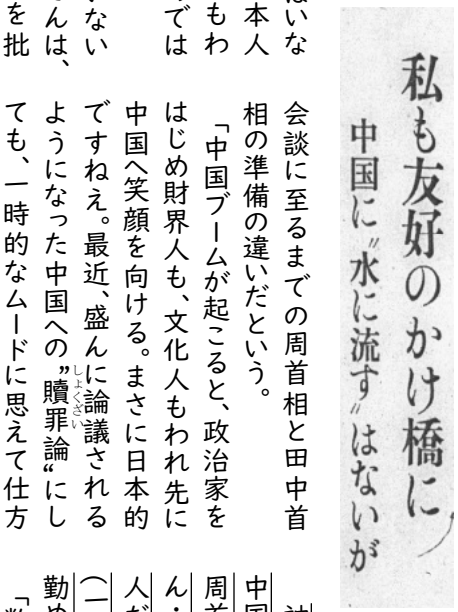
陳さんは来月上旬、母親といっしょに北京へ行って墓参りをする。陳さんにとって生まれて初めての中国との対面。「古い中国の文化や考え方がどのように受け継がれているか、じっくり見てきたい」と声をはずませる。

「戦後、中国は竹のカーテンのかなたにあった。国交断絶が長かったのは不幸なことには違いないが、逆ないい方をすれば、このブランクが、これまでの間違った先入観を洗い流してくれたことも事実。私は日本の若い人の中国観に期待を持っています」

神戸で育ち、神戸で学んだあと、中国に帰って活躍している人も多い。周首相の通訳をしている林麗韞(りん・れいうん)さん(三九)もその一人だが、陳さんの妹さんも二十八(一九五三)年に帰国、北京放送局に勤めている。

「数千年の歴史を通して、中国と日本の間にこれまで国交といえるようなつき合いはなかった。本当の意味での国交は、きょうから始まるわけですよ。私も神戸育ちの中国人の一人として、これからは日中友好のかけ橋となるよう努力するつもりです」ー柔和な陳さんの目が最後にキラリと光った。

はれればれとした口調で語る陳舜臣さん



私も友好のかけ橋に
中国に〝水に流す〟はないが

最初の傍線の補足

初めての中国(大陸)旅行。日本赤十字社が発行する証明書による探親訪問という形の旅行で、当時、北京放送に勤務していた妹・妙玲さんに会っています。

最初の傍線の箇所、「**生まれて初めて帰国することになりましたが…**」と語っています。ところで、幼少の頃から何度も台湾に帰っていますが、それは「帰国」ではなかったのでしょうか？

また、陳さんは『青雲の軸』で、神戸大水害を目の当たりにした主人公俊仁を、「**俊仁はあたりを見まわした。彼はこのとき、目の前の濁流から、ふと黄河や揚子江を連想した。(こんな色だろうか？)まだ見ぬあこがれの祖国の山河**」と描写しています。陳さんにとって台湾は「祖国」ではないのでしょうか？

二つ目の傍線の疑問

北京に参る墓があるのでしょうか？

三つ目の傍線の補足

写真(個人蔵)、右から、
・林麗韞さん
・曽月娥さん、のち、陳舜臣さんの弟、仰臣さんと結婚
・陳妙玲さん
三人は神戸中華同文学校特別班の同窓。

1945-1990　中国の政情 と 陳舜臣さんの文革観

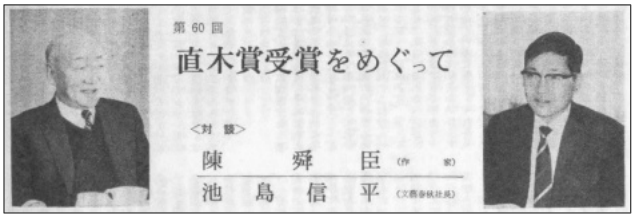
1945-1990　中国の政情と陳舜臣さん		
青字は台湾の政情　茶字は陳舜臣さんの事歴		
年	月	事　　項
1945	8	8月14日、日本、ポツダム宣言を受諾、9月2日調印 陳舜臣さん、中国(中華民国)籍に
1947	2	台湾、二・二八事件起きる
1949	10	中華人民共和国樹立
	12	国民党政府、台北に
1958	5	「大躍進」運動はじまる(～61)
	8	「人民公社」化運動はじまる(～82)
1959	4	劉少奇、毛沢東に代って国家主席となる(～68)
	7-8	廬山会議で彭徳懐、人民公社、大躍進を批判、失脚→文化大革命の中、非業の死
1961	1	中国共産党中央委員会(劉少奇主導)、大躍進の欠陥を認める
1966	8	文化大革命はじまる。「紅衛兵」出現
		老舎、紅衛兵に集団リンチを受け、翌々日、北京の太平湖で遺体で発見される
1968	10	劉少奇、失脚→1969年11月非業の死
1971	10	国連総会、中華人民共和国の国連代表権承認
1972	2	毛沢東、ニクソンと会談
	9	「日中共同声明」発表、日中国交正常化(日台断交)
	10	陳さん、初めての中国旅行。日本赤十字社が発行する証明書による探親訪問という形で、当時、北京放送に勤務していた妹・妙玲さんを訪ねる
1973	8-9	陳さん、甘粛、新疆など憧れの土地を歩く。この旅を機に、中華人民共和国籍取得。以後、台湾に入れなくなる
1974	9-10	陳さん、山西省、陝西省ほか旅行。山西省では大寨人民公社へも
1972-99年、陳舜臣さんの中国旅行は27回		
1975	4	台湾、蒋介石死去
1976	1月、周恩来死去。9月、毛沢東死去	
1978	8	日中平和友好条約締結
1987	7	台湾、38年にわたった戒厳令を解除
1988	1	台湾、蒋経国総統死去、李登輝総統誕生
1990	10	陳さん、日本国籍取得(前年の天安門事件を機に申請)

《1.こんな記事が日本でも報じられていました》

批判集会でつるし上げられる楊尚昆、羅瑞卿、陸定一、彭真の四氏

1967年1月26日付読売新聞夕刊

《2.陳舜臣さんの文化大革命観》



『新刊展望』に掲載された池島、陳、両氏の対談は、直木賞受賞直後の1969年４月です。

文化大革命では、劉少奇、彭徳懐など実権派(走資派)と称される人たちだけでなく、老舎のような作家、そして一般の市民までが紅衛兵による攻撃のターゲットとなり、その糾弾・暴行で、多くの人が傷害を受け、また、命を落としました。

対談の時期、既に、日本のメディアも、このような状況を報道しており、陳舜臣さんも文化大革命についての情報をお持ちであったはずです。それなのに陳さんは、文化大革命のような例として、中国史上の始皇帝の変革、王莽(おうもう)の「新」、洪秀全の「太平天国」をあげ、当事者三人を、「人間の精神の改造を志したロマンチスト」と、むしろ肯定的に評価し、毛沢東も、また、同じ文脈で話されています。不思議です。さらに、壁新聞の文言に言及し、「中国の殺すということばは意味を強めるだけで、血のにおいのないことば」とおしゃっています。陳さんの、文化大革命に対する認識の甘さはどこからきているのでしょうか。

(詳しくは、本通信No.23をご覧ください)

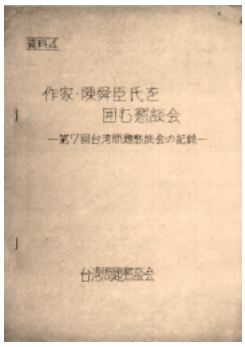
《補足.紅衛兵の執拗な糾弾に曝される劉・王夫妻》

劉少奇・王光美夫妻に対する執拗なつるし上げ・攻撃がエスカレートした。病状悪化の中、監禁され、十分な治療も受けられず、劉少奇国家主席は命を落とし、夫人は十年余、獄につながれた。裏には、江青の王光美に対する嫉妬があったとも言われている。

yagibamu.seesaa.net より

www.bannedbook.org より

「作家・陳舜臣氏を囲む懇談会」ー第7回台湾問題懇談会の抄録ー



「作家・陳舜臣氏を囲む懇談会」
話の内容：
「中国旅行で思いついたこと」
主催：台湾問題懇談会
日時：1974年12月8日
場所：大阪梅田「北京」
参加者：同胞約30名
■時期は、大寨にも行かれた中国旅行のすぐあとです

〔台湾解放〕

どういう話をしたらいいか困ってしまうのですが、まあ台湾問題というと話が大きくなりますけれど、中国側の原則ははっきりしています。今回も、10月2日に鄧小平副総理が世界各地から帰国した華僑に対して講話されたんですが、台湾問題は原則として平和交渉で解決する、しかしこれは相手があることだから、こちらが平和交渉でいっても相手が応じないということもあるから、非平和的な解決もありうる。また、今のところ台湾解放というのは比較的長期の仕事になるだろうと。

このような発言をかみあわせて考えますと、どうしても平和的解決でやらなければいけないという決意がうかがわれました。

スローガンといえば、農業は大寨に学ぶとか、工業は大慶に学ぶとかいろいろありますが、台湾解放というのは中国人の心を一つにまとめるスローガンになっていると思いましたね。

〔正反対をいく中国と台湾〕

中国を見ていろいろ感じましたが、台湾の問題と関連して考えますと、全然ちがった方向に歩いているということ、これは確かです。特に最近その傾向というか、差は大きくなっていると思います。

中国も劉少奇時代は、今日批判されているような国際分業論というものが盛んで、中国は重工業で立国するんだということで、農業やその他のことに冷淡というか軽視していたわけです。大寨できいた話ですが、山の上に水をあげて耕作するのでも、もったいないというのですね。そんな金と労力があれば重工業につぎこもうというわけです。

こういう国際分業論というのは劉少奇が批判される一つのポイントになったと思うのですが、台湾はこの分業論をそのままやっているという感じです。台湾の輸出入は、国民総生産中、貿易が占める割合が30パーセントぐらいだということで、これは大変大きな数字です。日本も貿易立国といいますが、それでも国民総生産中10パーセントそこそこなわけで、日本と比べても三倍以上です。

これは完全に国際分業論の路線なわけで、中国はこれを否定して自力更生でやっている。台湾が貿易量の大きさを誇示していることについても中国の人は大変笑っています。貿易量が多いということは対外依存度が大きいということであって、本当は自分のところでできたものを自分のところで自給自足できるのが一番いいんだと。

〔中国の華僑政策の背景〕

今、中国の外交政策の中では、東南アジア諸国の警戒心をといて友好関係を進めるというのが重点となっていると思います。ですから鄧小平さんも、外国にいらっしゃるみなさん方はできるだけその在留地の国籍をおとりなさい。こうおっしゃってられた。

しかしその方法論ですが、たとえば中日友好という場合、日本にいる中国人が全部日本人になってしまってはたして中日友好の趣旨にあうかどうかというと、私ちょっと疑問に思うんです。中国籍を持ち、中国的な生活をとどめた陳さんや李さんがとなりの佐藤さんや田中さんと仲良くする。私は今のところこれの方が中日親善の増進には役に立つと思います。

〔中国人は人類に貢献を〕

これは鄧小平さんがおっしゃっていましたが、中国人民は世界人民に大きな貢献をしなければならないというのが一番大きな原則なんです。そして、この原則に近づくにはどうしたらよいかということで、外国にいる中国人は在留地の国籍をとったほうがよいというのが、この大原則に対する一つのアプローチなわけです。

世界はどうせ大局的には国なんかなくなるんだと、共産主義というのはそういう状態をめざすわけですから、いずれにしろわれわれは前進する過程の中にいるわけです。

これでひとまず私の話をおわりたいと思います。

(文中、傍線は編集委員の加筆)

右は1974年11月18日朝日新聞夕刊掲載の記事、部分。

詳細は本通信No.18参照。

大寨のこと
新中国を支える根
陳舜臣
自力で農業の模範に
胸打つ村人の心意気

編集後記

本号１面、陳舜臣さんの談話の記事、写真下の惹句に、「はればれ陳舜臣さん」とあります。しかし、「日中共同声明」から、「台湾と事実上断交」は明白です。陳さんの立ち位置からすると、心中、複雑なものがあったと推察いたします。また、２年後、３回目の訪中時、鄧小平副総理から、「台湾解放」について、「非平和的な解決もありうる」との講話がありました。昨今の台湾海峡、とても「はればれ」といえるような空模様ではありません。陳さん、どんな心境で見下ろしているでしょう。